フランス領植民地の農産物・資源植物

日本郵趣協会 植物切手研究会

フランスの海外植民は17世紀に始まりました。その後、フランスは西欧列強との植民地獲得競争を経て戦間期にはアフリカを中心に広大な地域を獲得、その植民地経営のために有用植物の営利栽培・プランテーション化を推し進めました。

本作品では、仏領植民地で栽培され、利用されてきた農産物・資源植物を地域ごとに展示します。

1．仏領西アフリカ

仏領西アフリカは 1895 年に、仏領セネガル、仏領スーダン、仏領ギニア、仏領象牙海岸を含む地域に成立した。その後、仏領ダホメ、オートボルタ、仏領ニジェール、モーリタニア植民地が加わり、８つの地域に拡大したが、1959 年に解体した。

1-1. 共通図案となったアブラヤシ

仏領西アフリカで最も重要な資源植物はアブラヤシである。一般にアブラヤシと呼ばれている種は、アフリカの熱帯雨林を原産地とするギニアアブラヤシ（*Elaeis guineensis*）で、果肉と種子から油脂がとれ、パーム油と称される。利用価値の高い換金作物としてプランテーション化が進んだ。

仏領西アフリカの６地域から、1906 年から 1907 年にかけて共通図案のアブラヤシの切手が発行された。

＜仏領セネガル＞

（1906 年、6 種/8 種）

（1911 年 Fatick／Senegal から Paris/France 宛、35c 貼りカバー）

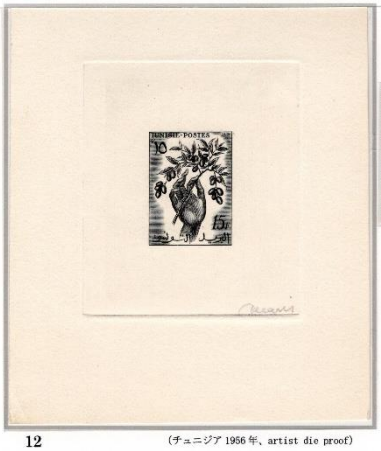
5．北アフリカ・地中海沿岸地域

フランスは北アフリカ地域のアルジェリア（フランスの支配期間：1848-1962 年）、チュニジア（1881-1956 年）、モロッコ（1912-1956 年）を支配し、大きな権益をえた。

＜ナツメヤシ＞ *Pheonix dactylifera* は北アフリカから西南アジアが原産と考えられ、乾燥地帯に適し栽培の歴史は古い。実はデーツと呼ばれ、主要な食品である。

（アルジェリア 1936-40 年、2 種/3 種）

（チュニジア 1926 年、5 種/15 種）



（チュニジア 1956 年、artist die proof）

＜オリーブとブドウ＞
フランス国内の需要を賄うため、オリーブとブドウは大量栽培され、本国に送られた。

（チュニジア 1956 年）

（アルジェリア 1950 年）

＜多彩な農産物＞

（チュニジア 1957 年、2 種/8 種）

8．仏領インドシナ

現在のカンボジア、ラオス、ベトナムと中国広東省湛江市に相当する地域は 1887 年から 1954 年にかけてフランス領インドシナをと呼ばれ、フランスのアジアの拠点であった。

＜イネ＞ 大規模な稲作プランテージョンが行われ、コメが最重要農産物であった。

田植え

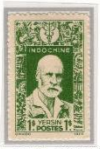
（インドシナ 1931-41 年、5 種/11 種）

（1933 年 Vientiane/LAOS から Paris/France 宛カバー）

稲刈り

（ラオス 1963 年）

＜ゴム＞ 医学者であった Alexandre Yersin はインドシナに赴任後、ゴムノキの導入を図ったが、英領地域には及ばなかった。



（仏領インドシナ 1945 年、1 種/3 種）

＜チーク＞ インドからインドシナ半島に分布する *Tectona* 属の樹木はチーク材と呼ばれ、高級材として着目された。

材木の運搬にはゾウが活躍

（ラオス 1958 年）